

小川正子

おがわ まさこ 1902-1943

ハンセン病患者救済に生涯をかけた女医



戦前、不治の難病として多くの人が苦しんできたハンセン病。医師・小川正子は、その患者たちに、慈愛の手を差し伸べることに半生をささげた。41年という、その短い生涯は、愛と奉仕の精神にあふれていた。

小川正子の足跡

長島愛生園への旅立ち

光田健輔の下でハンセン病患者救済に尽力したいという強い決意で、長島愛生園の棧橋に一人降り立った正子。その突然の訪問に驚き、「棧橋から来た娘」とあだ名がついた。



長島愛生園の本館前での記念撮影。後列右から3番目が小川正子、前列右から2番目が光田健輔

映画 小島の春

「夫と妻が 親とその子が生き別れる 悲しき病 世に無からしめ」と正子が詠んだ歌が残された手記「小島の春」は、映画化され大ロングランとなった。



春日居村を訪れた主演女優の夏川静江(左)と小川正子(右)



瀬戸内海に浮かぶ長島愛生園(岡山県)全景

笛吹市春日居郷土館・小川正子記念館

医師として、また歌人としても優れた才能を発揮した小川正子の貴重な資料を展示。年譜や胸像、短歌をはじめ、日記や正子が着た衣類などがあり、晩年療養した家も復元されている。



父が正子の療養のために建てた家

笛吹市春日居郷土館
笛吹市春日居町寺本170-1
TEL 0553-26-5100

春日居郷土館 検索



正子がいつも持っていた聖書。そこには正子が好きだった言葉が直筆で書かれている。

進むべき道を心に決めた
恩師光田との出会い

小川正子は明治35(1902)年、東山梨郡春日居村(現・笛吹市)桑戸で、製糸工場を営む家に生まれた。19歳の時に結婚はしたものの、すぐに離婚。その後、医学の道を志し、大正13(1924)年、東京女子医学専門学校(現・東京女子医科大学)に合格。医師への道を歩んでいった。卒業を間近に控えた昭和4(1929)年、病院見学のために訪れた現在の東京都東村山市にあるハンセン病療養所「多磨全生病院」で、正子は、自身の将来を決定づける光田健輔園長と出会う。ハンセン病研究の第一人者として知られる光田は、患者救済へ熱い思いを持ち、ひたむき

「愛の道」を進み続けた
正子の生涯

ンセン病療養所第1号として瀬戸内海に浮かぶ長島という小さな島に「長島愛生園」が開設された。光田が初代園長を務めることを知った正子は、再び光田の下での奉仕を願った。しかし、一向に返事がないので、手荷物一つだけ「長島愛生園」に旅立った。突然押し掛けてきた若い女医に、驚く医局の医師たちを尻目に、正子は翌日から熱心に患者の診察に当たり、すぐに正式な医局員として採用された。

当時、瀬戸内海の島々や四国の山あいの村々には、ハンセン病に対する正しい知識が伝わっていなかったため、家族の中に患者が出れば自宅の中で隔離された生活をしていった。正子は、光田の命により、ハンセン病患者たちの収容、そして、家族に治療や予防法などを説明するため、瀬戸内や四国各地の山村巡りに

に患者に接していた。そんな姿に正子は強く心を打たれ、自らもハンセン病患者救済に生涯をささげることを決意したという。

二度と古里に戻らないと決めた長島愛生園への旅立ち

27歳で学校を卒業し医師となつた正子は、多磨全生病院の光田を訪れ、光田の下で働きたいと申し出た。しかし、光田は、家族とよく相談し、大きな病院で十分に学び、開業できるほどの腕になってからと、返事をした。その後、正子は、東京の久保病院などで内科と細菌学などの臨床研究をした。

昭和5(1930)年、国立ハ

出掛けた。正子は、患者たちのために少しでも役に立ちたいと、困難な山坂を越え、無我夢中で患者を訪ね歩いた。

身をていして患者救済に当たる中、正子はいかに過労から結核となり、長島愛生園で闘病生活を送った。その間、光田の勧めで検診の旅についてつづることを試み、その手記は昭和13(1938)年、「小島の春」として出版され、ベストセラーとなる。その2年後には映画化され、大ロングランとなった。

志半ばで休職し古里春日居村に戻った正子は、療養生活を送るが、昭和18(1943)年、41歳で短い生涯を閉じた。

笛吹市の佛念寺(ぶつねんじ)に眠る正子の墓碑には、生前正子の好きだった言葉が刻まれている。「生きていく日に愛と正義の十字路に立たば必ず愛の道に就け」。この言葉こそ、正子が信じ貫いてきた生き方そのものに違いない。

小川正子の写真提供は、笛吹市教育委員会